

「ユビキタス時代の歩み方講座」第5回 2006/6月号

「知識創造への小道」

速水 智子

<http://www.hayamizu.jp>

みなさま、こんにちは。

今回は、情報の進化や形式知と暗黙知についてお伝えしました。暗黙知は、その人固有の知で、人にくっついて離れない、粘着性の強い知でした。一方、形式知は、言葉や文字からも伝わるようなマニュアル化できる知でした。

今回は、知を高める知識変換のプロセスや、その先へとつながる「創造性」について、お話したいと思います。

知識変換のプロセス

知識をより価値のあるものに高めていくことを、暗黙知と形式知の変換を通して説明しようとするものが「知識変換」という考え方です。

これには、共同化、表出化、連結化、内面化の4つの活動があります。この4つの活動を通して、知はより高い価値あるものへと変化していきます。では、少し言葉の説明をいたしましょう。

知を共同化し、表出させる

共同化は、暗黙知から暗黙知を得ることです。ある一人だけができることを、他の人もできるようにすることです。言葉で表しにくい知識をどのように伝えるかということ、同じことを体験する中で、観察、模倣、練習によって他の人にもできるようにするのは、職人の匠の技を得るために共に行動するようなことです。

表出化は、暗黙知から形式知を得ることです。言葉で伝えにくい暗黙知を他の人に言語で伝えることです。例えば、新しい商品の特徴について議論するような場合、自分の頭の中にある漠然としたアイデアを相手に伝えなければなりません。このように難しい知を表出させるために、メタファーといって、例えを使う場合があります。これは特に対話によって引き出すことができます。

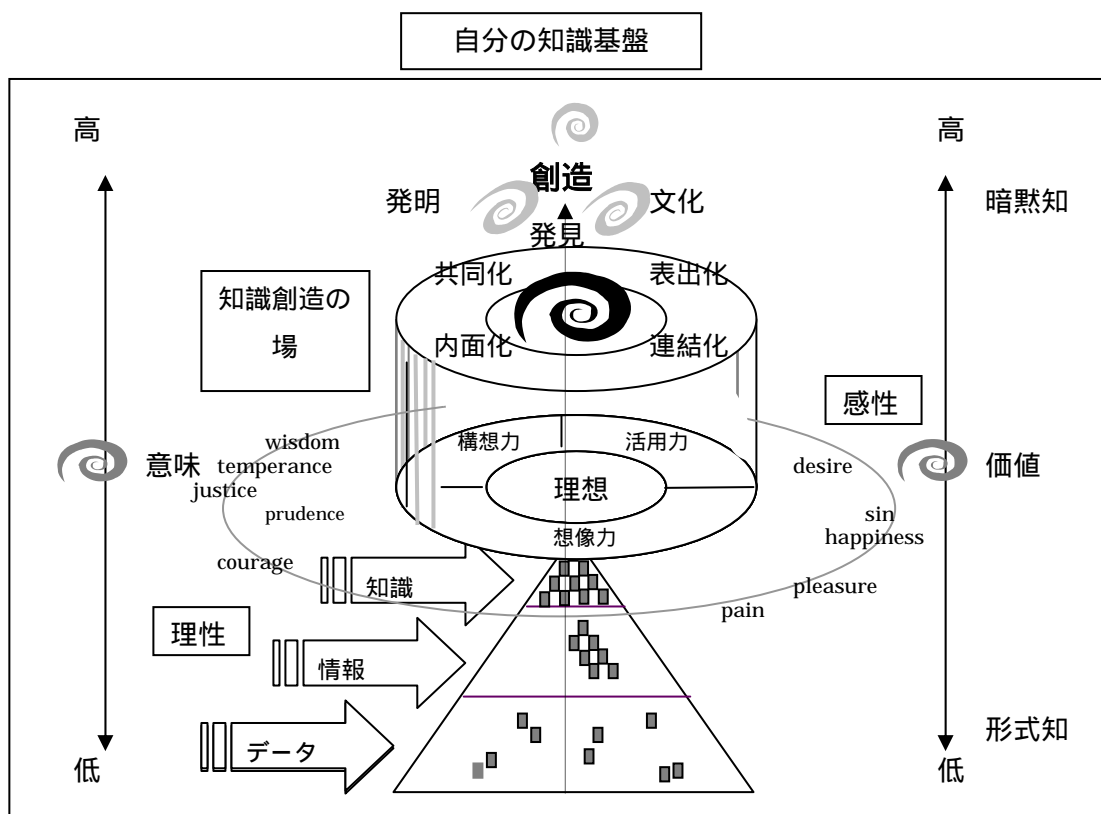
知を連結させ、内面化する

連結化は、形式知から形式知を得ることです。言葉で表現された知識を組み合わせ、新しい知識を創りだします。学校における教育や訓練にあたります。

また、内面化は、形式知から暗黙知を得ることです。マニュアル化された知識を実際に使っていくことで個人の中に暗黙知が蓄積されるようにすることです。自分だけのノウハウ

を身につけたというようなことです。

これらの異なった4つのモードが相互に行ったり来たりと作用しながら、知識変換をおこし、知は高まっていきます。知識変換のプロセスは情報の不思議さについて、多くの示唆を私たちに与えてくれます。すでに、ビジネスの世界では、このような考え方をを用いて、組織の中で、従業員が独創的なアイデアを生み出せるように様々な工夫がこらされています。



創造の大切さ

さて、ここで知識変換をさらに高いレベルへと至らせる「創造」について考えてみましょう。知識のもっとも高次元な次元として「智慧」といった言葉も使われますが、今回は図に示すように、創造にとどめておきます。

科学者や発明家、小説家や画家、音楽家のように物を創り出す人々にとって、最高の知の表現として「創造性の発揮」があります。

これまで人類の歴史は、偉人や天才による「創造活動」によってもたらされたものが、社会を変える源でもありました。

河合隼雄の創造について

河合隼雄が創造について、その著書『イメージの心理学』の中で、「緊張からの開放の時

期をもつことが、創造のためには必要である」と数学者アンリ・ポアンカレを引用して述べています。ポアンカレが一生懸命数学の定理を考えていたある日、仕事を忘れ、ふと馬車の階段に足が触れた瞬間、天啓がくださったごとく定理が浮かびました。このことからポアンカレは潜在意識の方が意識より、豊かに考えの組み合わせをなしているものだと結論付けました。河合は又、「あらゆる創造は葛藤に耐え、それを抱きかかえていることから生まれるのではなからうか。創造をしたいと思う者は、いかにエネルギーを必要とするかを知っていなくてはならない。面倒なことを避けるといったことから創造は出て来ない。」とも述べています。

自分を離れた時降りてくるもの

つまり創造というものは、その課題について考えに考えぬき、心身ともに消耗し、苦しみの中、限界まで没頭する。やがて、このような心的緊張が解けた瞬間にやってくるものだと言えましょう。

私たちに人生の中で、一生懸命悩み、苦しくもその境界を超えた瞬間、さっと天啓が降りるかのような経験をしたことはあるのではないのでしょうか。

まさに“摩訶不思議”の瞬間です。多くの創作活動をする人々が「この作品は、何かに書かされたのです。」といった表現を使うことから多いにうなずけます。

「創造活動」とは、私たち人間がうかがい知ることのできない宇宙の真理が備わった深遠なものかもしれません。

一人ひとりの創造的活動

さて、「知識社会」の到来と言われて久しいこの頃です。私たち一人ひとりが社会においても生活の中でも知識を高めることが求められています。さらに、今後は、その人、固有の暗黙知や創造性を発揮することがより、重要となります。

すでにインターネットやデジタル道具は、自分を表現したり、アイデアを公開することをいともたやすく可能とします。例えばブログというインターネット上の日記では、自分の考えを世界に発信することもできます。今では名も無い市井の人々が優れた文章や作品を生み出して、世の中に少しずつ、影響をもたらしています。まさに、「一億総表現時代」の到来を物語るものです。

このように天才ばかりが創造性を発揮するのではなく、個人が創造性を活かし、自分を語る時代が訪れようとしています。

創造への一步

さて、創造への一步には、自分の人生をどこへ向かって進ませるのかといった「舵取り」がとても大切になります。なぜなら、情報の洪水の中で、必要なデータを取捨選択し、高めるのは、ほかでもない“自分自身”だからです。

そのためには、情報の進化に決定的に影響を及ぼす、自分の価値軸を持つ必要が出てきます。

図に示した通り、理想や理念をもつということは、自分なりの価値軸をもつことでもあります。

価値軸というのは、この自分の知識基盤の中で 1 本筋の通った背骨のようなものです。知識社会においては、これまで以上に、このことは重要になるでしょう。価値軸によって、その人に集まる情報に秩序が生まれてきます。その結果、行動や言動に首尾一貫したその人らしさがにじみ出てきます。

混沌とした多くの情報の中から価値軸をいしずえに自分の思想体系を創り上げるということは、人生を創造的に生きている姿そのものです。

二十一世紀は信仰の時代、思想の時代と言われています。

このような“知”の性格からアプローチすることで、信仰というものの、新たな意味も見えてくるのではないのでしょうか。

2006/06